

海底にCO₂埋めるCCS事業

地震で破断も

住民ら不安

千葉 全国9カ所で計画されている「CCS(二酸化炭素回収貯留)」。初の事業化が予定されている千葉県の「首都圏CCS」に対し、地震などによる影響に住民から不安の声が高まっています。(千葉県・宮澤春代)

東京湾に面した君津市の工業地域で回収・圧縮した二酸化炭素(CO₂)を、同市と木更津、袖ヶ浦、市原、長柄、茂原、白子、大網白里、九十九里の9市町を通る約80キロのパイプラインで送り太平洋の海底に貯留する同事業。地震などでパイプが破断し高濃度のCO₂が地上に



九十九里沖に設置されたリグ(撮影は佐久間ひさよし共産党大網白里市議)

プレート境界 リスクだらけ 米では事故続発 住民被害も

パイプ埋設予定のルートには天然ガス田が点在しています。日本共産党県委員会と地方議員が4月に行った県環境研究セン

進む地盤沈下

噴出すれば、被害ははかり知れません。アメリカではすでに2020年2月、24年4月、同年9月にパイプラインの破断などによる漏えい事故が発生。20年のミシシッピ州の事故では現場から約1・6キロ離れた村の住民など45人が病院に搬送され200人以上が避難しています。

太平洋、ユーラシア、フィリピンなどのプレートの交わる世界でもまれな地域で、大規模な地震が危惧されています。「Zoback & Gorelick」などの海外の学術論文はC

とほ明らかです。安全の担保になり得ないことは明らかです。

14日には、住民らが行政不服審査法に基づき経産省に試掘の許可取り消しを申し立てました。申し立てに参加した共産党の佐久間ひさよし・大網白里市議は、「子どもの頃からの思い出の海を壊すわけにはいかない。恵みの海の未来を守るためにも一人でも多くの人に知ってもらい、ともに行動する」と話しています。

クローズアップ

パイプラインのイメージ



監視「数百年」

貯留したCO₂は数百年にわたる監視が必要とされ、一連の工程に数兆円規模のコストを要します。CO₂を海底に埋めて「なかった」ことにして排出を続ける同事業は、世界のCO₂排出削減の流れに逆行するものです。国際環境団体「FoE Japan」も問題を提起し、千葉県内では地元住民らが「九十九里の海を守る会」を立ち上げて中止を求める署名に取り組んでいます。アーティストのコムアイ氏が自身のネット番組で同会の代表者と対談したり、テレビの情報番組が特集を組んだりするなど注目を集めています。

CO₂の海底貯留が地震を誘発し、海洋汚染のリスクがあると指摘しています。技術が未確立であるにもかかわらず、政府は同事業を見直すどころか4月に九十九里沖の試掘を許可。今月にはベトナムから「リグ」(掘削装置)が到着しました。